

# 伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

色見熊野座神社の前を過ぎ、山鳥へ向かう。

此処には神々の祠が、道路に沿った形で鎮座しています。幾つあるのでしょうか、素朴なとなみの中に、鎮守の杜としての役割をはたしてきました。

山鳥には、「おたつちよさん」があります。阿蘇家が南阿蘇に居を構えた時代、信仰の対象として、火口崇拜の道すがら阿蘇山への出入りの要として重要な位置でした。

様々な古文書類に登場する「山鳥」には、「搭所」すなわち「たつちよ」があり、その意味するものは、身分の高い家の墓地であります。今は大きな「たぶのき」の下に僅かに残る墓石の残欠が、あまりにも惨めな思いを呼び起こします。

山鳥の地名は、修験の霊場として山を歩く行者は高いところを見ながら歩く。その目標となり仏神の聖地へと導



▲色見熊野座神社

くのが鳥類である。と本田秀行著信仰風土記に書かれています。

一説では、山鳥の面積は広く、根子岳前面すなわち上色見までも山鳥と呼んでいました。

今は僅かに残る、山鳥の長き歴史。阿蘇家との関わりが、もつと沢山見聞出来るといいのですが、正確な発掘調

査を必要と思われます。鎌倉時代には、北条氏の治世下となり、約百年北条氏

によって山鳥、白水、吉田は治められます。しかし何れの地にも、小国満願寺のような北条氏としての文化財を残していませんでした。

それらは、この百年が過ぎると、いずれも阿蘇家領に戻ります。それほどにこの地は阿蘇家にとって、重要な位置をしめていたのでしょうか。

阿蘇山丸山を発する「館川」が、包み込むように色見熊野座神社の前を流れます。

色見熊野座神社は山鳥より下段にあり、きつと以前まではそれを繋ぐ手段として、釣り橋か或いは直接川を渡っていたことでしょう。

この宮の創建は、上色見熊野座神社の分社で、享保七年一七二二年に設立されています。

しかしこの宮が、色見熊野座神社となる相当前から、此処は聖地として崇められていたと思われます。神社と並ぶように正面右手には墳丘があり、下段左手にも小さな墳墓らしきものがあります。神仏混合の時代を経て、元は

光西寺という室町時代以来の地蔵を本尊とする寺院がありました。

高森町には熊野座神社が四社あります。上色見熊野座神社、色見熊野座神社、河原熊野座神社、下切熊野座神社です。いずれも紀州熊野が発祥の地であり、その三山は聖地として本宮、新宮、那智であります。

熊野信仰の特徴と言えるものは、水田地帯には少なく、畑作地帯すなわち山間部に多く存在するのは、熊野三山の地理的条件によるものでしょう。

三山のうち新宮には巨石信仰があります。色見熊野座神社にはその片鱗とみられるものが、残っております。この地には元、兜石という巨岩がありこれは阿蘇大神の荒御魂、石君大將軍であると言われ、色見熊野座神社には、この石君大將軍を共にまつり上げられています。石君さまは、色見の地名にも由来していると言われております。

色見熊野座神社一带を歩いてみると、じつに多くの神々に出会います。きつと慕われていたのだこの思いと、災害に立ち向かった先人の姿が、彷彿とわきあがってきます。